FWU MAGAZINE

福岡女子大学広報

No.125 | 2026



特集

新学科開設

生活情報科学科

環境理学科

My life

九州電力株式会社
北九州支店副支店長（営業本部長）

園田 理恵さん

特集
Special feature

新学科開設

2027（令和9）年4月

国際文理学部
環境理学科

国際文理学部
生活情報科学学科

2027年4月、国際文理学部に「環境理学科」と「生活情報科学科」が誕生します。自然科学の視点から地球規模の環境課題に挑む環境理学科と、生活者の視点と最新のデジタル技術を掛け合わせて社会課題を解決する生活情報科学科。多角的なアプローチで持続可能な社会の実現を目指し、より豊かな未来の暮らしと社会を拓く人材を育みます。



福岡女子大学広報
FUKUOKA WOMEN'S UNIVERCITY MAGAZINE
No.125 2026

［表紙］アカショウビン
バードウォッチャー憧れの鳥、アカショウビン。日本と東南アジアを巡るその渡りの姿は、世界へ羽ばたきグローバルに活躍する福女大生の姿に重なります。
撮影：言語教育センター　NIGEL ROBERT STOTT ／福岡県宮若市にて

Contents

特集

新学科開設

生活情報科学科 2-5
環境理学科 6-9

研究室紹介 環境科学科 瀧下 清貴 10

My life

九州電力株式会社　北九州支店副支店長（営業本部長）
園田　理恵さん 11-13

社会で羽ばたくなでしこたち
キャセイパシフィック航空 カネガエ サチさん 14

FWU TOPICS 15-16

成果報告 17

人事消息 / 福岡女子大学基金 18

生活情報科学科

Department of Living Environment Science and Informatics

生活情報科学科は、現在の環境科学科・環境マネジメントコースの学びを継承・進化させ、社会課題の解決に必要な「生活・情報・政策」の融合領域を追求します。データ解析やプログラミングなど実践的なITスキルの修得を大幅に強化。生活者の視点と最新テクノロジーを組み合わせ、身近で多様な課題にアプローチする力を養います。前身となる、環境マネジメントコースの３年生２人と応用データ科学研究室の卒業生にお話しを伺いました。



（株）NTTデータ九州
卒業生
小嶺 岬夕さん

環境科学科３年
自然資源管理学研究室
双田 陽さん

環境科学科３年
人間工学研究室
尾谷 一花さん

環境科学科
応用データ科学 教授
藤野 友和

「何をしたいかわからない」から始めてもいい

藤野：在学生の尾谷さんと双田さんにお聞きします。環境科学科に入学した理由を教えてください。

尾谷：最初から環境科学科を目指していたわけではありませんでしたが、漠然と環境問題に興味がありました。環境科学科を知ってから調べると、姉の友人に福岡女子大学（以下福女大）に通っている人がいたので、話を聞きました。幅広く学んだ上で研究室を選択でき、自分の興味があることをより深く学べると聞いて自分に合っているなと思いました。

双田：私は高校時代にやりたいことが明確ではありませんでしたが、出身の北九州市は環境教育が盛んで、環境保全に関心を持っていました。そのことから進学先を調べると福女大と他県の大学にしぼられました。化学や生物学的なアプローチがしたいのか、人の生活に対するアプローチをしたいのかが決められなかったので、福女大ならコース選択まで1年間考える猶予があるという点で進学を決めました。

藤野：2年次からのコース分けでは、環境自然科学コースと環境マネジメントコースはどのようにして選びましたか？

尾谷：まちづくりや環境づくりに興味を持っていたため、環境マネジメントコースを選択しました。





双田：私は環境保全について学びたいと考えた時に、環境経済学に興味を持ったので環境マネジメントコースを選びました。

藤野：卒業生の小嶺さんはなぜ本学を選びましたか？

小嶺：私も将来やりたいことがはっきりしていなかったので、入学後でもいろいろな選択肢がある大学を探していました。生物が好きだったこともあり、生物系に関連しながら、環境についても学べる福女大に魅力を感じました。他県の大学も候補にありましたが、最終的には福女大を選びました。コース選択の決め手は藤野先生の授業でした。当時、統計解析やデータ分析に使用するプログラミング言語の一つであるR言語の授業があり、難しかったのですがやってみると興味深く、またデータ分析にも面白さを感じました。これからAIやITが発展していく中、将来のキャリアを考えた時に自分が興味を持っている分野に絞り込み、藤野先生の応用データ科学研究室を選びました。

授業との出会いが、専門分野を見つけるきっかけに

藤野：これまでに学んだ中で、印象に残っている科目はありますか？

双田：環境経済学や環境経済学演習など、行動経済に関する授業に興味を持ちました。人の心情に働きかけるためには、経済の面からアプローチしなければ効果が出ないことを学んで面白いと感じました。

尾谷：小崎先生の授業で、環境の中でも環境衛生学や環境人間工学を学んできました。人間の生理的反応や心理的要素に興味を持ったので、それらをより深く学べる人間工学研究室を選びました。

双田：私は研究室を選ぶ時に、まちづくりなども楽しそうだと思っていましたが、楽しさだけではなく自分が環境に対して何をしたいのかを考えて、自然資源管理学研究室を選びました。

藤野：生活情報科学科でも、1年次はコンピューターサイエンスやプログラミング、統計学、公共政策概論、生活経営学など、各分野の専門科目の基礎を学び、2年次から自身の興味や関心の方向性を少しずつ定めながら、履修する科目や専門性を決めていくことができます。具体的にやりたいことが決まっていなくても、勉強しながら探すことができるのは安心ですね。

専門分野を越えて身近な課題を考える

藤野：尾谷さんと双田さんは研究室でどんな研究をしていますか？

尾谷：これまで環境問題に漠然と興味を持っていましたが、授業を受ける中で、環境のことだけではなく経済的な側面や人間の生理的な要素も含めて考えなければならないことを知りました。単に実験結果だけから考えるのではなく、結果に対して様々な側面から考えることが必要だと知ることができたのは良かったです。これから研究室で、光や温度・湿度などの環境因子が人の心や身体に与える影響を理解し、人の体の仕組みに合わせた快適で健康に過ごせる住環境デザインについて研究していきたいと考えています。

藤野：人間工学研究室では実験を行って、その結果を解釈することが主な研究の流れです。それに関連する様々な要因があり、幅広い知識を身に付けて研究に取り組まなければいけないということですね。双田さんはいかがでしょう。

双田：自然資源管理学研究室では、熊本県の阿蘇地方で過少利用が進んでいる自然資源について、利用や管理に関わる人を増やす取り組みをしています。また、大丸福岡天神店に飾るクリスマスツリーを作る取り組みをしています。大丸福岡天神店はSDGs推進の一環で、クリスマスツリーを通



じて自然を守り続ける人々の思いを未来に届けるための活動をしています。そこで今回は、阿蘇地方の自然資源である茅を利用したクリスマスツリーを制作するのですが、大丸福岡天神店の方とミーティングを行う中で、茅は性質上燃えやすいことや、人が見て綺麗だと思わなければ足を止めてもらえないことなど、厳しいご指摘をいただき勉強になっています。

藤野：クリスマスツリーのプロジェクトでは、2年生で学んだデザイン系の知識に加え、「茅は燃えやすい」という化学的な性質を考慮する必要があります。さらにアンケート処理や分析など、統計処理やデータ分析の知識が役立ちますね。続いて、小嶺さんの学生時代の研究テーマを教えてください。


自然資源管理学研究室にて茅を利用したクリスマスツリー制作の様子

小嶺：私はネット通販などのECサイトを見た時に視線がどう動くのか、サイトに対してどの程度満足感を持つのかをアンケート調査し、視線の動きのデータとアンケート結果を組み合わせてモデル化する研究をしました。人間工学に近い研究ですが、人が自然にウェブサイトを見るときの視線データを数値化し、そこから得られたデータに加えて被験者の所属や国籍なども含めた様々な要素を組み合わせて、その人にとって本当に満足度の高いウェブサイトにはどのような要素があるのかという研究でした。

藤野：ECサイトなので経営学や経済学の分野も関係しています。様々な知識を総動員して取り組む研究で、身の回りの課題を解決するために必要な分野は生活情報科学科でも学ぶことができます。

学びが進路と仕事に繋がっていく

藤野：尾谷さんと双田さんは今後の進路についてどのように考えていますか？

尾谷：人間工学に関する研究室がある大学院に進学したいと考えています。

藤野：尾谷さんは人間工学をさらに極めていきたいということですね。それだけその分野に魅力を感じているということですね。

双田：私は今の学びを生かして行政機関で働くことを目指しています。小嶺さん、就職活動に向けて勉強以外にやっておくべきことは何かありますか？

小嶺：自己分析と企業分析だと思います。自分から企業を知りに行かないと、選択肢は広がりません。私は就職支援員や先輩に話を聞いて、自分自身を見つめ直しながら就職活動を進めました。行政機関で何をしたいのかなどをもっと深掘りし、自分がやりたいことについて先生や周りの人に相談すると、より明確になるのではないかと思います。

藤野：双田さんはやりたかったことを仕事につなげていく、正に研究室で学んでいることが、将来につながっていく進路選択ですね。小嶺さんが今の就職先を選んだ理由を教えてください。





小嶺：大学3年生の4、5月頃から就職活動を始めましたが、業界や業種を絞れておらず、IT業界やコンサルティング業界など、様々な業界を見ていました。また、アルバイトでウェブサイトのデザインを作った経験から、自分でアイデアを形にすることの面白さを感じていました。研究室でも自分でデータから何かを読み解いて分析し、そこから提案する一連の流れが面白いことに気づきました。現在のSE（システムエンジニア）という職種も、お客様からの要望を形にしていくプロセスにとても魅力を感じました。

藤野：現在はどのような仕事をしていますか？

小嶺：現在担当している業務は海外に拠点を持つ日系メーカーのお客様に対して、販売基盤システムの構築を支援する仕事です。クラウド型の「Salesforce」システムを使った開発を担当しています。販売基盤とは、商品の売買に欠かせない受発注の仕組みをはじめ、見積もりや営業管理など、企業の営業管理を支える土台とな



る業務プロセスを指します。

学生の頃、研究室ではデータ解析コンペや、卒業論文に向けてデータをみんなで分析し、課題の特定から解析まで行いました。さらにその課題に対する対策の立案や実行まで、一連の問題解決のプロセスを日常的に実践していました。現在の仕事においてもこの問題解決のプロセスは実務のあらゆる場面で活用していて、研究室で培われた経験が生かされていると感じています。

藤野：小嶺さんが所属していた私の研究室では課題解決型学習（ＰＢＬ）の一環として、毎年3年生がデータ解析コンペティションに参加しています。コンペでは実際の企業から提供されるデータを半年ほどの長い期間をかけてチームで分析を行うことにより、データ分析のスキルはもちろんのこと、協調性やリーダーシップなども身に付けることができます。

生活情報科学科ではよりその部分に力を入れようとしています。身の回りの課題や地域づくり、まちづくりについて、生活科学、数理情報科学、政策科学という三つの領域から学びを展開します。それらを単独で学ぶのではなく、様々な分野を融合させながら、情報をどう組み合わせて活用するのかを学べることもこの学科の特徴です。また、基本情報技術者試験や統計検定の資格取得に向けた支援も行う予定です。座学での学びに加えて、より実践的な学びを取り入れていきます。

自分を探せる大学



藤野：最後に皆さんから高校生に向けて、本学の魅力とメッセージをお願いします。

尾谷：高校生の時は、大学選びが自分の進路を決めてしまうのではないかと思って将来に対する不安がありました。しかし、実際に入学してみると、自分の興味のある分野からさらに興味を広げることができました。そのおかげで人間工学という分野を見つけることができました。

双田：高校3年生の時は勉強ばかりで、将来について考える時間もあまりありませんでした。皆さんも大学選びが自分の将来に直結するのではないかと不安になると思います。その点、福女大であれば幅広く学べるので、自分でも思いもよらなかった分野に興味を持ったり、新しい分野を見つけたりすることができます。学びたいことや将来について迷っている人にはおすすめです。

小嶺：福女大であれば選択肢がたくさん広がるので、その中で新しい出会いがあり、自分の興味がある分野や優先順位を見つけられると思います。そこを専門的に深めたり、その分野を生かして就職先を考えたり、進路の幅も広がります。自分の将来がはっきりしていない人は、自分を探せる大学だと思います。大学生になったらぜひいろんな経験をしてほしいです。長い夏休みや春休みがある中で、海外に行きたい、長期で旅行したいなど自分でやりたいことをしてほしいと思います。

藤野：生活情報科学科は、現時点で特定の何かに興味がある人だけでなく、まだ興味や進路が定まっていない人にも良い選択肢になるのではないかと思います。その中で、自分が「これだ」と思えるものを見つけてほしいと思います。

※本文中に出てくる科目名は、生活情報科学科では名称が変更になる科目があります。



環境理学科

Department of Environmental Science

環境理学科は、現在の環境科学科・環境自然科学コースの専門性を更に深め、自然環境の保全や課題解決により強みを持つ学科へと進化します。「化学探究」と「生物探究」の専門コースを設け、先端の基礎研究から社会実装までを追求。データやAI活用などの最新教育のもと、地球環境問題に挑む実践力を構築します。前身となる、環境自然科学コースの４年生２人と人間環境科学研究科の卒業生にお話を伺いました。



環境科学科４年
神経生物学研究室
酒井 美菜子さん

（株）西部技研
卒業生
本松 深月さん

環境科学科
大気環境学 教授
馬　昌珍

環境科学科４年
大気環境学研究室
宇都 美晴さん

研究開発職として活躍する卒業生

馬：卒業生の本松さんにお聞きします。在学中は、どのような研究を行っていましたか？

本松：洗剤の成分である界面活性剤が水溶液中で物の表面にくっつく吸着の様子を調べ、水晶の振動と物理の計算を使って間接的に解明する研究をしていました。

馬：現在、どのような仕事に取り組まれていますか？

本松：古賀市に本社がある株式会社西部技研で、産業用の空調機器の研究開発に携わっています。私は研究開発部門の中でも分析系の業務を担当しており、様々な分析機器を使って製品の評価を行ったり、特許関連の業務に携わったりしています。

馬：具体的にどのような分析ですか？

本松：吸着剤であるゼオライトなどの鉱物を粉末にした材料を対象に分析しています。例えば、どの程度の大きさの細孔があるのかといった材料の特性を調べています。

馬：研究室で学んだことや研究内容は、現在の仕事に生かされていますか？

本松：福岡女子大学（以下福女大）で学んだ知識が生かせると思って現在の会社を選んだ部分もあります。ただ、研究で扱って





いたものとは少し種類が異なるため、直接的につながっているわけではありませんでしたが、福女大で学んだ知識や実験を進める上での考え方などは、仕事をする上で生かされていると感じています。

在学生が取り組む最先端の研究と卒業後の進路

馬：在学生の酒井さんと宇都さんが、現在学んでいること、そして卒業後の進路について教えてください。

酒井：私は神経生物学研究室に所属して、チャコウラナメクジという外来種のナメクジを対象に触角の再生について研究しています。現在は視覚関連タンパク質を指標として再生の過程を調べています。卒業後は関東の大学院への進学を考えています。

馬：なぜ関東の大学院への進学を選択したのでしょうか？

酒井：現在の研究もとても面白いのですが、研究を進める中で将来は人間の病気に関わる研究をしたいと思うようになりました。細胞制御やがんなどの病気について、分子的に基礎研究に取り組みたいです。大学院での具体的な研究テーマはまだ決まっていませんが、もし今と同じようにタンパク質を追跡したり免疫染色を行ったりする研究であれば、現在の研究経験を生かせるのではないかと思っています。

宇都：私は大気環境学研究室に所属しています。卒業研究では下水処理場周辺における大気質の調査を行っています。卒業後は行政機関で環境分野の技術職として、水質や大気などの監視や事業者が法令に基づいて適切に業務を行っているかを確認する業務に携わる予定です。工場などの煙突から排出される粒子などを測定し、大気質を分析して得られるデータの扱い方などは、研究で学んでいることを生かせるのではないかと思います。

馬：専門分野を生かしながら更に社会で必要となる知識やマネジメント力を身に付けることも重要ですね。皆さんにはそれぞれの専門性を生かした将来を目指してほしいと思います。

「グローバルな学び」社会へ向けての幅広い学び

馬：本学での学びを振り返って良かったことはありますか？

宇都：私が福女大を選んだ理由の一つは、英語の授業や国際交流などグローバルな学びの機会が充実していると感じたからでした。環境に関する知識を身に付けて、社会に出た時に様々な国や立場の人の視点に立って仕事ができるようになりたいと思っていました。

馬：本学は、国際文理学部という学部名の通り、学部共通科目の中に必修科目として英語（留学生は日本語）が置かれています。

宇都：私は、もともと英語があまり得意ではありませんでしたが、1年生のときには週5日英語の授業があり、英語に触れる機会がたくさんありました。寮生活を通して様々な国の方と交流できたことも想像していた以上に英語を使う機会につながりました。2年生では、体験学習プログラムの一つであるDavisプログラムに参加して、アメリカのカリフォルニア大学デイビス校を訪れました。福女大は英語が得意でなくても、英語に触れてもっと学びたいと思ったときに学べるプログラムが整っていると思います。

馬：Davisプログラムはカリフォルニア州を訪れ、ホームステイをしながら、食や環境、持続可能な社会に関する視野を広げることを目的としたプログラムで、専門分野



について学びながら英語でのコミュニケーション能力の向上にも取り組むことができたと思います。酒井さんはいかがですか？

酒井：私も幅広い分野の中から自分の興味のある分野を深く学べたことが良かったと感じています。文理統合教育で文系科目も習得できることや、理系科目の中でも幅広い分野を学べることは、福女大の魅力だと思います。私は化学と生物のどちらにも興味があり、入学後に両方を学びながら自分の進みたい方向を考えることができました。また、資格取得についても先生方が積極的に呼びかけてくれました。私自身、バイオ技術者認定試験（上級）を取得しましたが、先生が過去問題を用意してくださり、分からない問題について質問すると丁寧に教えてくださいました。そして研究だけでなく学生生活とのバランスも取りやすく、少人数制だからこそ、リーダーを務めたり、新しいことに挑戦したりしやすい大学だと感じています。

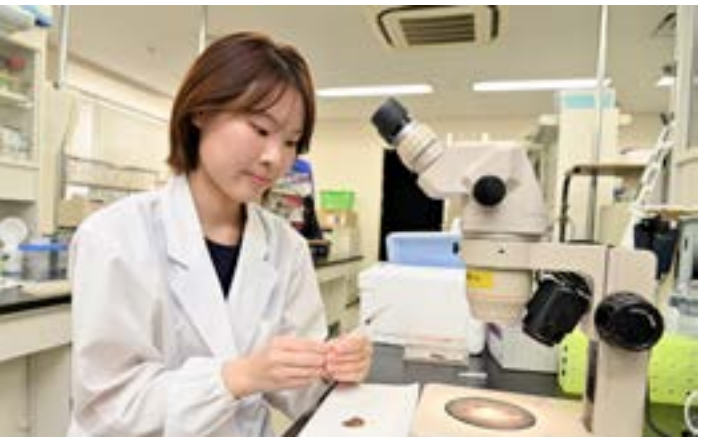


馬：大学の役割は学生に幅広い学びの機会や選択肢を提供することであり、その中からどのように自分の成長につなげるかは学生自身に委ねられていると思います。社会に出てから求められるのは知識そのものだけではなく、多様な学びや経験を結び付けて生かす力であり、大学生活はその力を育むための貴重な時間だと思います。社会人の立場から、本松さんお願いします。

本松：会社で働いてみると、これまで学んできた専門的な知識も大切ですが、それだけでは仕事は完結しないと感じます。会社では異なる部署の方とやり取りをしたり、自分の専門分野以外の知識を学んだりしながら、多角的な視点で仕事を進めなければいけません。学生時代に様々な知識を身に付けるために主体的に行動することはとても大切だと思います。新しく入学する学生さんにも専門分野だけでなく、英語などにも積極的に挑戦して、福女大に整っているプログラムを最大限に活用してほしいと思います。

馬：自分が興味を持ったことにチャレンジし、その経験から学んだことを自分なりにつなげていくことが社会に出たときにも生きてくるのだと思います。

幅広い学びが生み出す可能性と環境理学科が目指す未来





馬：環境理学科では化学と生物の両面から環境問題を研究し、最終的には人間・動物・環境を一体とする考え方の実現や脱炭素、環境保全に貢献できる人材の育成を目指しています。環境理学科に期待することを教えてください。

宇都：私は国際的な視野を持ちながら環境を学べることに魅力を感じて福女大に入学しました。入学してから学ぶ中では、最初に持っていたイメージとは違う分野に興味を持ったり、もっと深く学びたいことが生まれたりすることもあると思います。そのときに、自分が力を入れたい分野をしっかり研究できるプログラムが整っていてほしいです。環境理学科としての専門性がより高まるからこそ、研究室での学びや研究環境も、更に充実していくことを期待しています。

馬：環境理学科と生活情報科学科ができることで、それぞれの専門性をより深めることができます。一方で、情報分野は現在、どの専門分野においても重要です。環境理学科においても、ＡＩを含む情報技術を取り入れながら、専門分野と情報を組み合わせた教育を充実させていきたいと考えています。本学では研究をより充実させるための体制づくりについても、取り組んでいきます。



本松：幅広く学べる環境があるからこそ、自分から学びをつかみ取っていくことが大切だと思います。二つの学科に分かれることで、もう一方の分野を学ぶ機会が少し減るかもしれませんが、自分の主専攻の学びを深めつつ、それとは別に自分の興味のある学問分野を学べる副専攻プログラムがあるので、積極的に活用して、様々な知識や経験を身に付けてほしいです。自分で考え、行動できる人材は社会でも求められていると感じていて、私自身もそのような人になりたいと考えています。福女大はそういうことを経験できる大学です。

多彩な選択肢、「面白い」から見つかる自分のやりたいこと

馬：最後に高校生・受験生の皆さんへのメッセージをお願いします。

酒井：福女大で学ぶ魅力の一つは、研究分野の選択肢が多いことだと思います。1、2年次に様々な科目に触れた上で研究室を選択できるため、自分がやりたいことを探しながら学び、そこから専門分野を見つけることができます。また、少人数制なので、苦手な科目についても先生方に丁寧に教えていただけます。得意不得意に関わらず、興味のあることを学べる体制が整っています。少しでも環境問題や科学に興味がある方は、ぜひ福女大で学んでみてください。

宇都：私は入学前から大気環境について学びたいという思いがあり、それをきっかけに環境科学科を選びました。福女大では、興味のあった分野を深く学べたことはもちろん、授業、研究、留学など、経験を重ねる中で興味が広がることもありました。「これを学びたい」という自分なりの軸を持つことは大切ですが、入学してから学ぶ中で、自分が本当に学びたいことや新たに興味をひかれることが見つかることもあります。ぜひ、興味を持ったことには積極的に挑戦し、自分が進みたい道を見つけてほしいです。

本松：福女大では、化学系や生物系の分野を基礎から学び、そこから社会の課題である環境問題の解決につなげていくことができます。そのため、進学や就職先の選択肢も幅広いと思います。私自身、高校生の頃は将来何になりたいのか、はっきり決まっていませんでした。大学で授業を受ける中で「面白い」と感じることが進路につながることもあります。まずはいろいろなことに興味を持って取り組んでみてください。その経験が将来の可能性を広げることにつながると思います。

馬：環境理学科では、環境問題に重点を置いた教育と人材育成を進めます。1年次に自然環境に関する基礎的・実践的な知識を身に付け、解決に意欲的に取り組める人材を育成します。そして、2年次からは「化学探究コース」と「生物探究コース」に分かれて専門知識を学びます。「化学探究コース」では、環境汚染や環境エネルギー、資源循環などを対象に、環境に関連する知識や調査・評価技術を身に付けます。「生物探究コース」では、生態系や集団遺伝、環境応答など生物学的な視点から環境を捉えます。

両コースを通じて、現代社会のあらゆる環境課題に取り組める人材育成を目指します。最初から自分には関係ないと決めつけず、4年間に一つでも多くのことに挑戦し、様々な学びに触れてほしいと思います。



※本文中に出てくるプログラム等については2026年度時点のものです。

目に見えない海の生物が支える生態系のしくみを探る

―微生物の多様性と生態的役割の解明を目指して―

海の生物というと、魚や海藻を思い浮かべる人が多いかもしれません。しかし、海には肉眼では見ることのできない微生物が数多く暮らしています。それらは生物同士の共生や物質循環を担うだけでなく、時には病気を引き起こすなど、海洋生態系の形成に大きな影響を与えています。

環境生物学研究室では、海の中でも特に干潟の生態系に注目しています。干潟は海と陸をつなぐ重要な生態系であり、水質浄化や生物多様性の維持、水産資源の生産など、人間社会にも多くの恩恵をもたらしています。本学の近くには和白干潟があり、学生とともに現地へ出かけて調査を行うこともあります。一方で、干潟に生息する微生物の多様性や生態的役割については、未解明な部分が数多く残されています。私たちの研究室では、遺伝子解析や顕微鏡観察などを用いて、こうした微生物の実態解明に取り組んでいます。例えば、干潟の食物網を支える単細胞の光合成生物である珪藻類について、和白干潟をはじめとする各地の干潟で調査を行い、これまで見過ごされていた珪藻類が優占していることを明らかにしました。また、潮干狩りでもおなじみのアサリには未知の微生物が寄生しており、アサリの健康に影響を及ぼしている可能性も見出しています。さらに、微生物に加えて、海藻などを対象とした研究にも取り組んでいます。その一例として、九州沿岸に生育する天然ワカメでは、近距離の産地間でも遺伝的に識別できることを示しました。この成果は、天然ワカメの産地ブランドの保護や地域水産業への貢献が期待されています。

私自身は、学生時代から海にはまだ多くの謎が残されていることに興味を持っていました。中でも私が惹かれたのは、肉眼では見ることのできない微生物です。海の微生物の世界には、いまだ多くの謎が残されています。未知の生物や、それらが海洋生態系で果たす役割を明らかにしたいという思いから、この分野の研究を続けています。

現在は、アサリと同じく潮干狩りの対象であり、環境省レッドリスト*で絶滅危惧Ⅱ類に指定されているハマグリについても研究を進めています。ここでも未知の寄生微生物の存在を示唆する興味深い結果が得られつつあります。今後も、微生物の多様性や生態的役割を解き明かし、干潟をはじめとする海洋生態系の理解と保全に貢献できる研究を進めていきたいと考えています。


干潟の風景

＊環境省レッドリスト：日本に生息又は生育する野生生物を対象に、種の絶滅の危険度をリストにまとめたもの。

プレスリリース
2026.05.13
天然ワカメを
DNAで識別可能に


国際文理学部　環境科学科
環境生物学研究室
教授 瀧下 清貴 Kiyotaka Takishita

京都大学大学院農学研究科博士後期課程応用生物科学専攻修了。株式会社海洋バイオテクノロジー研究所ポストドクトラル研究員、国立研究開発法人海洋研究開発機構主任研究員等を経て、2017 年より現職。専門は原生生物学、分子進化学、生態学。博士（農学）。

vol.17

My life

CORPORATE INTERVIEW

さまざまな業界で活躍をする
人生の先輩たちからの、
学生たちへのメッセージ



好奇心から広がる未来。
誠実に向き合うことで拓ける自分らしいキャリア



profile

九州電力株式会社
北九州支店副支店長（営業本部長）

園田（そのだ） 理恵（りえ）さん

福岡県出身。1993 年九州電力に入社しシステム開発に従事。1998 年に結婚し 1 男 2 女を授かり、育児休職と育児短縮勤務で働き続ける。2014 年からダイバーシティ推進担当として女性活躍を推進。福岡県内の女性管理職ネットワークの立ち上げにも携わり、多くの女性管理職と出会う。2021 年から営業部門にて福間、福岡東、久留米営業所長を経て、2025 年 7 月から現職。



ロボットと共存する世界へ馳せた夢

どんな子供時代でしたか？

一言で言うと、とにかく好奇心が旺盛な子でした。知らない街に行っても公園を見つけると「滑り台を滑ってこよう！」と走り出したり、アリの巣をずっと観察したりしていました。近所の友達と缶蹴りやドッジボールをして、外を走り回る活発な小学生でした。また、父が技術系の仕事をしていて天体望遠鏡を買ってきてくれたので、夜中に月や土星の輪っかを見たこともワクワクする思い出として残っています。

その頃の夢を教えてください。

『鉄腕アトム』を作る科学者になりたかったんです。アトムって10万馬力で強いだけでなく、感情があって人間のお友達になってくれるロボットですよね。中高生の頃に父から薦められて読んだアイザック・アシモフのSF小説『われはロボット』で「ロボット三原則」のロジックに触れ、「科学の力で人間とロボットが共存する未来を作れたら素敵だな」と憧れを深めました。

興味で進んだ工学部。かけがえのない仲間と過ごした日々

理系分野への進学にあたって周囲から反対の声はありましたか？

私の周囲では幸いそういう声はありませんでした。興味のある方向に素直に進んだ結果、九州工業大学の知能情報工学科を選びました。当時、曖昧な人間の判断をコンピュータで扱う「ファジー理論」が話題で、AIの芽生えのような技術に惹かれたんです。姉は語学が好きで文系に進みましたから、環境だけでなく本人の興味や脳の適性なのかなと感じます。私が専攻した学科は100人中女子が15人ほどで、工学部の中では比較的女子が多い方でした。女子が少ない分、男子学生からもグループやドライブに気さくに誘ってもらえましたし、女子同士もギュッと結束して本当に楽しかったですよ。

学生のうちに「やっておけばよかったこと」「やっておいて良かったこと」はありますか？

やっておけばよかったことは親孝行を兼ねた旅行です。社会人になるとまとまった休みを取るのが難しくなります。学生のうちに、ご両親と一緒にじっくり旅行しておくことを強くおすすめします。

やっておいて良かったことはとにかく思い切り遊んだことです。学生時代は肩書も利害関係も一切なく付き合える唯一の時期です。単位を落として泣いたことなど、素の自分を知っている友達は大人になっても一生モノの存在です。

地元で社会を支える仕事へ。20年越しに見えた新たなやりがい

今の職業を選んだ理由と、入社して印象に残っていることを教えてください。

当時は「ロボット研究者になるのは生半可な気持ちでは難しい」と悟った時期でもありました。東京への憧れもありましたが踏ん切りがつかず、地元で身近に社会へ貢献できる大きな仕事がしたいと考え、システム系の職種で九州電力に応募しました。

20代後半の時、自分でテーマを企画して海外で調査ができる社内の「マイプラン研修」制度に応募しました。Windowsが出始めた1997年頃、「情報通信革命の震源を求めて」というテーマでアメリカに渡航してマイクロソフト社があるシアトルなど各地で調査を行いました。若手に挑戦させてくれる風土はとてもありがたかったですね。



新入社員の頃「博多どんたく港まつり」にて

インフラ企業としての仕事に手応えや、やりがいを感じたのはいつ頃ですか？

実は、「この会社に入った意味を実感できた」と本当に心から思えたのは、入社して20年ほど経った40代前半のことでした。結婚・子育て期を経てふと振り返った時、台風対応などで夜を徹して働く社員たちの姿や、停電から復旧した際のお客様の「電気がついて良かった！」という声の重みを実感したのです。暮らしや経済を根底から支えている実感が湧き、会社への誇りが深まりました。最初から運命の仕事に出会えなくても、飛び込んだ先で誠実に努力を重

ねるうちに、後から本当のやりがいが追いついてくることも多いです。

辛いときこそ口角をあげて。子育てとキャリアの両立

就職を考える中で仕事と育児の両立には不安があります。子育てしながら、女性が働き続けることにはどんな意味があると考えますか？

私自身、子どもが3人いてワンオペになる時期もあり、寂しい思いをさせた申し訳なさもありました。それでも続けられたのは、子どもたちがたくましくきょうだいで協力し合うようになり「お母さんが働く姿を見て自分も働こうと思えた」と言ってくれたこと、そして保育園を利用することで「社会とつながる自分の時間」を持てたからです。また、自分が限界を迎えた時に上司が「家庭を壊してまで仕事をさせようとは思っていない」と温かく理解してくれたことや、家族のサポートも大きな助けになりました。



女性が働き、経済力を持ち続けることは「生きる選択肢を広げること」です。経済的な面で自分の将来の選択肢を広げられたり、子どもがやりたい習い事をさせたりすることもできます。今はテレワークやフレックスタイムなど制度も整っているので、家庭と仕事の両立を考える時には、ぜひ先輩たちの実体験を聞いて選択肢を増やしていってほしいです。

仕事において最も大切にしてきた姿勢はどんなことですか？

とにかく「ポジティブでいること」そして「辛いときこそ口角を上げること」です。トラブルなどで現場が大変な時でも、痩せ我慢でもいいから笑顔で「お願いできますか？」と話しかけると、周りが「大変だね、助けるよ！」と前に進む言葉をくれます。明るくポジティブなオーラを出していれば、物事を前に動かすエネルギーが集まってきます。

技術×生活者視点。これからの時代に求められる理工系人材とは

園田さんは理工系分野でご活躍されてきましたが、AIの発展によって理工系分野ではどの様な能力が求められてくると思いますか？

どれほど技術が進化しても「その技術を使って生活者のどんな困りごとを解決するか」という視点がなければ意味がありません。特に女性は身近な変化や「あの人困っているのかな」という細やかな観察力・共感力に長けています。最新のITやDXスキルの土台の上に生活者視点を掛け合わせることができる人材は、これからの社会で間違いなく強く求められます。



最後に、これから社会に出ていく学生たちへメッセージをお願いします。

若い皆さんには無限の可能性があります。だからこそ、自分の興味を限定せず、いろんな人の話を聞き、いろんな体験をして「選択肢を広げること」を大切にしてください。「あれはどうだろう？」「これも面白そう！」と好奇心を持って選択肢を広げ、その中から自分がどう生きたいかを考えていくプロセスは、とてもワクワクする楽しい時間です。皆さんが自分らしい道を切り拓いていかれることを応援しています。

Interviewer 学生インタビュアー感想



国際教養学科3年
福岡県立久留米高校出身
こたに あやか 小谷彩華さん

幼い頃に魅了されたロボットや科学者への思いを、形は変わっても一途に持ち続けていたことが印象的でした。私もしなやかに進み続けることを忘れずに、思い通りにいかない時こそ、笑顔でポジティブに振る舞えるように心がけたいです。



国際教養学科1年
筑陽学園高校出身
なかの わかな 中野和奏さん

社内での海外調査活動や、子育ての中で管理職に挑戦されたお話から、常に前向きに挑戦し続ける姿勢が印象に残りました。周りの情報に敏感にアンテナを張り新たな世界に出会うことで、自分の可能性を広げていきたいです。

社会で羽ばたく なでしこたち #13



キャセイパシフィック航空

カネガエ サチさん

2024年度　国際文理学部 国際教養学科卒業

世界中を飛び回り、自ら学び続ける日々

機内の安全を守りながら世界中から集まるお客様に心のこもったサービスを届けるキャセイパシフィック航空の客室乗務員として働いています。子供の頃から英語が大好きで、様々な国の人と話すのが楽しかった経験から、「世界中を飛び回って、まだ知らない文化に触れたい！」と思い、この仕事を選びました。この仕事の魅力は、新しい街に降り立ち現地でその国の料理を味わえることです。食べることが大好きなので、毎回新鮮な発見があります。

社会人になって最も実感したのは、「好きなことをどう自ら学び続けていくか」ということです。当初は戸惑いもありましたが、今では自分で計画を立てて学ぶ過程そのものを、少しずつ楽しめるようになってきました。例えば、客室乗務員として大切なコミュニケーション能力を高めるため、日本語の丁寧な表現やビジネス英語を、YouTubeで学んだり先輩に教えてもらいながら日常的に練習し、実際の接客で使うようにしています。また、大学時代に授業で触れた哲学の本に今も興味を持ち続けており、人の考え方や価値観について考える時間を大切にしています。好きなことや勉強と仕事を両立させながら、日々成長できることにやりがいと楽しさを感じています。

多様な環境での挑戦

私はタイ人と日本人のハーフで、タイの学校に通いながら日本の文化に強く魅了され、「日本の大学で学びたい」と思いました。そこで、進学説明会やインターネットで情報を集め、福岡女子大学と出会いました。国際色豊かで、寮生活を通じて多様な人々と深く交流できる環境に魅力を感じて入学を決意しました。

学生時代は、大学祭の企画・運営に携わったり、タイ人高校生向けの大学紹介イベントに参加したりする貴重な機会をいただきました。また、英語資格の取得にも取り組みました。大学で言語を集中的に学べたことは本当に良かった感じています。今の仕事で多国籍のお客様と楽しくコミュニケーションが取れるのも、そのおかげです。（少し振り返ると、スポーツ系のサークルに入っていれば、健康的な生活習慣が自然に身についていたかも、とも感じています）



［学生時代］ゼミ最終日に佐藤教授と

試行錯誤と不採用を乗り越えた経験

就職活動では自分に合いそうにない業界に勢いで挑戦したり、説明会や相談会で他の学生を見て「みんなすごいな…」と不安を感じたりしました。面接練習を重ね、自分に足りないものを探していく日々を送っていました。休学期間もあったので、「これをどう伝えよう」と悩むこともありました。

コロナ過で採用が止まった時期は他の道も考えましたが、徐々に採用が再開されてからは、本命であった客室乗務員の選考に集中しました。何度も不採用を経験しましたが、その度に落ち込みながらも失敗を振り返り、対策を続けました。繰り返し失敗から学ぶことで、少しずつ前へ進む強さを身に付けました。いつも大切にしているモットーは「あきらめずに、マイペースに頑張ること」です。

福女大生へのメッセージ

大学での生活も社会に出ることも新たな始まりなので、オープンマインドでいる姿勢が大切です。「将来何になろう？どんな仕事をしよう？」と悩む時は、好きなスイーツでも食べながら、今はとりあえず好きなことを学び続け、少しでも興味のある業界に挑戦してみることをおすすめします。

1 January 2026.1.31

「女性トップリーダー育成研修」10 周年



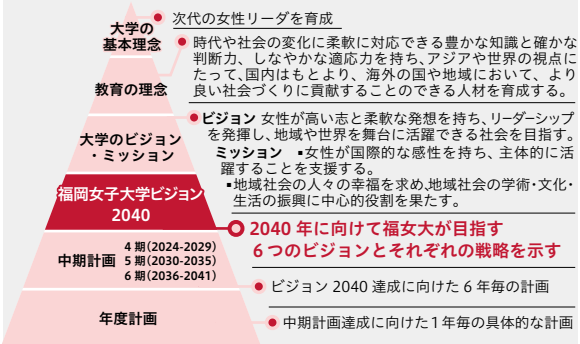
2016 年に開講した「女性トップリーダー育成研修」の 10 周年を記念し、シンポジウムを開催しました。本研修は社会人女性を対象に、産学官のリーダーとの対話や自分機軸で新価値を生む「アート思考」を取り入れたプログラムを展開。志と行動力を磨き、業界を超えたネットワークを育む中で多くのリーダーを輩出してきました。この 10 年の歩みと知見を結集し、今後は本研修をブラッシュアップするとともに、学生教育へと還元し、未来を紡ぎ続けます。

3 March 2026.3

「福岡女子大学ビジョン 2040」

次の 100 年に向けて新たな一歩を進めるにあたり、これまで培ってきた歴史と地域社会の特色を踏まえつつ、未来社会への責任を果たすべく「福岡女子大学ビジョン 2040」を策定いたしました。

少子化が進む今日、多様な知識を組み合わせた学びと、社会で活躍する女性の力が求められています。「次代の女性リーダーを育成」という本学の基本理念のもと、社会に新たな価値を作り出す女子教育の中枢を担う大学として、これからも進化を続けていきます。



10 October 2025.10.4

女子大学連盟総会



2025 年度女子大学連盟総会が本学にて開催され、全国 20 の女子大学から学長ら 43 名が参加しました。向井学長が議長を務め、女子大学の意義を社会へ広めるための広報活動、トランスジェンダー学生の受け入れなどの議題について議論を交わしました。

また、女子大学連盟として初めてのシンポジウム「いま、女子大学を考える」を開催しました。少子化に伴い共学化や募集停止が相次いでいる一方、女性の理系人材を求める声もあることから、女子大学の意義や未来を広く発信する機会となり、オンライン参加も含め約 120 名が参加しました。

11 November 2025.11.3

レンコン掘り＆交流イベント



学生 25 名が佐賀県白石町を訪問し、特産のレンコンをテーマに交流イベントを行いました。地元の青年農業者グループ（4 H クラブ）の指導で収穫を体験し、本学の同窓会「筑紫海会」佐賀支部の支援によるレンコン料理や郷土料理「須古寿し」を堪能し、ワークショップで親睦を深めました。泥に触れる体験や地域との交流を通じ、食文化と人とのつながりの大切さを学ぶ貴重な機会となりました。

7 July 2026.7.8

日本文化を探究「Independent Study Project（ISP）」発表会



海外協定校から交換留学生を受け入れるWJC（The World of Japanese Contemporary Culture Program）では、交換留学生がそれぞれの関心に基づいて選んだテーマで日本文化と社会に関する研究を進めます。今期のISPは、日本の文学や祭り、ジェンダー、タトゥー、漫画やゲームなど、幅広いテーマに及び、発表はいずれも日本文化を海外からの視点で捉え直すことで新たな気づきをもたらす興味深い内容でした。ISP発表会は7月と1月の年2回開催しています。日本文化について新たな発見が得られる機会ですので、在学生の皆さんもぜひ聴講してみてください。

8 August 2026.8.5

学外合説見学ツアー



アクロス福岡で開催された㈱学情主催の企業研究イベントを体験する「学外合説見学ツアー」に、1・2年生34名が参加しました。合同説明会に一人で参加することに不安を感じる低学年の学生も気軽に参加でき、企業や社会への理解を深めることができました。全体説明後、実際に企業ブースを回り、様々な業界や仕事について知ることで、学生自身の興味や関心も広がり、将来の仕事や働き方について考える貴重な時間となりました。

4 April 2026.4.6-6.19

美術館10周年記念展



福岡女子大学美術館は2026年春に設立10周年を迎え、開催した記念展「Passage––福岡女子大学美術館アートの10年」では、本学ゆかりの作家や卒業生による寄贈作品を約50点展示しました。美術品を学生の日常空間に散りばめる独自のスタイルを続ける当館にとって、所蔵の名品や貴重な資料を一堂に公開したこの展示は、その存在意義と地域の文化拠点としての可能性を改めて提示する機会となりました。

5 May 2026.5.9

FWU杯2026



FWU杯は、例年2年生が1年生のために企画・運営するスポーツ・ダンスの行事です。今年も初夏の晴天のもと、学科を超えて編成された6チームが、ドッジボールや練習を重ねた応援合戦で競い合い、思い出深い一日となりました。

1年生にとっては同級生との交流が生まれ、新たな友人を作る貴重な機会となり、今後の大学生活をともに過ごす仲間との絆を深める充実した行事となりました。

「韓国環境・資源・エネルギー大賞」受賞

韓国産業通商部･気候エネルギー環境部は、韓国の環境･エネルギー産業の発展方向を示し、産業界全体に好影響を与えた企業や個人研究者を表彰し、2025 年 12 月に授賞式を実施しました。環境科学科の馬昌珍教授は、カーボンニュートラルと気候変動への対応、革新的エネルギー転換という時代課題を先導する分野に関して多数の学術論文を発表し、韓国環境・資源・エネルギー大賞を受賞しました。



環境科学科
教授　馬　昌珍

第 73 回日本栄養改善学会学術総会

「若手学会発表賞 最優秀演題賞」を受賞

2026 年 9 月 11 日～ 13 日に別府大学で開催された、第 73 回日本栄養改善学会学術総会において、大学院人間環境科学研究科の松尾遥さん（指導教員：佐久間理英准教授）が若手学会発表賞最優秀演題賞を受賞しました。93 の演題がエントリーする中わずか 5 演題が選ばれる狭き門をくぐり、リサーチコアでの研究成果「高齢者における食品摂取の多様性と生活習慣の関連性」が高く評価された快挙です。



大学院 人間環境科学研究科
松尾 遥さん

10 年の補導員活動への感謝状

2026 年 5 月 25 日、国際教養学科の木村貴教授は、長年にわたる福岡県警東署少年補導員としての活動が評価され、感謝状を授与されました。木村教授は、地元地域における見回り活動などを中心に 10 年間補導員として活動し、少年の非行防止と健全育成活動に尽力されてきました。「今後も、大学教育のみならず、未成年の少年・少女に寄り添った活動を続けていきたい」と意気込みを語りました。



国際教養学科
教授　木村 貴

「令和 8 年度 永年栄養士・管理栄養士養成教育者表彰」受賞

食・健康学科の片桐義範教授が、一般社団法人全国栄養士養成施設協会より令和 8 年度永年栄養士・管理栄養士養成教育者表彰を受賞しました。

本表彰は、同協会の会員校である栄養士・管理栄養士養成施設に長年勤務し、栄養士・管理栄養士養成に多大な貢献をした教員に対し表彰状を授与し、その業績をたたえるものです。



食・健康学科
教授　片桐 義範

「令和 8 年熊本地震」被災地支援活動報告

この度の令和 8 年熊本地震により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

2026 年 8 月 8 日～ 18 日、食・健康学科の佐久間理英准教授が、大規模災害時に栄養・食生活支援を行う日本栄養士会災害支援チーム（JDA-DAT）の一員として、令和 8 年熊本地震の被災地に派遣されました。現地では避難所での食事状況の把握や物資の管理、人材調整等の活動に従事しました。

人事消息

Personnel column

2025.9.1～2026.8.31

［教　員］

退職	国際教養学科	教授	野依　智子	2026.3.31
	環境科学科	准教授	黒木　昌一	
		准教授	弓削　昌弘	
	食・健康学科	教授	舟木　淳子	
新任	環境科学科	教授	加藤　剛平	2026.4.1
		准教授	長野　稔	
		講師	金　柄鎭	
	食・健康学科	講師	藤原　久子	
		助手	土岐田小百合	
昇任	環境科学科	教授	松永　千晶	2026.4.1
		准教授	竹内　亮	
	食・健康学科	教授	南里　明子	
	言語教育センター	准教授	田上　優子	

［職　員］

退職	学生支援センター	副センター長	田中 万里絵	2026.3.31
	アドミッションセンター	副センター長	山本　凌	
	経営管理センター	主任	椿　優子	
		副センター長	瀬戸口 英樹	2026.6.30
新任	経営管理センター	事務局次長兼 経営管理センター参事	宮崎　孝臣	2026.4.1
		主査	溝口　典子	
	国際化推進センター	主事	中村　伊吹	
	アドミッションセンター	主任	神本　正輝	2026.7.1
昇任	戦略企画センター	副センター長	山口　千恵	2026.4.1
	国際化推進センター	副センター長	平川　春美	
	経営管理センター	副センター長	赤阪 美和子	2026.7.1

福岡女子大学基金

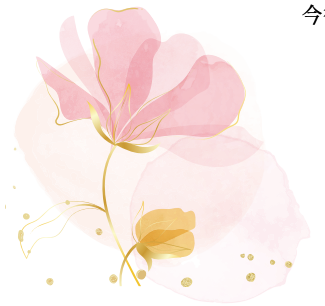
Fukuoka Women's University Fund

本学では、グローバル化に対応した国際的に活躍できる女性の育成や社会における女性の能力の発揮に寄与することを目的に「福岡女子大学基金」を設立し、教育研究、社会貢献、国際化推進等の活動に対する支援に活用しております。

本基金の趣旨にご賛同いただき、多くの方のご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

寄附者ご芳名

福岡女子大学基金へのご寄附に、心から感謝申し上げます。
2025 年度にご寄附いただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます。
今後とも、福岡女子大学基金への温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。
（ご芳名の公表に、ご了承いただいた方のみ掲載しています）



寄附者様

500万円（遺贈）
ご芳名のみ掲載

秋枝　蕭子 様
佐藤　秀樹 様
ほか 匿名希望　1名

ご寄附について

http://www.fwu.ac.jp/donation/

福女大の今をお届けします！

公式 Instagram を開設しました！

福女大の魅力を発信中。
ぜひ、フォローをお願いします。

◀フォローはこちら

「ここ花ラジオ」配信中！



学生のリアルな声をゆるくお届け。
感想・お便りもお待ちしております。

Listen to us
Podcast

◀ご視聴はこちら

20歳の原点

20 years old as a starting point

毎回、福岡女子大学に縁のある方々を紹介します。
あの人の20歳の頃、どんなことを考え、
どんなことに迷い、どんな選択をしてきたのか
若き日々の原点となるライフストーリー

profile

浅田 浩子 Hiroko Asada

国際文理学部 食・健康学科 助手



2009年本学 人間環境学部 栄養健康科学科（現食・健康学科）卒業後、同大学院へ進学。修士号取得後、芦屋町へ管理栄養士として入庁し、町立芦屋中央病院 医療技術部 栄養科に配属。2025年3月退職、2025年4月より本学 食・健康学科助手に着任。翌年から本学博士後期課程に進学。日本糖尿病療養指導士等の資格を生かした社会活動経験や、臨床経験を生かし、現在は、糖尿病患者におけるチアミン濃度低下要因の解明を目指して研究を進めている。

20歳の頃の私は、この福岡女子大学で管理栄養士や教員の免許取得を目指し、日々の授業や実習、テスト勉強に追われる毎日を過ごしていました。ですが、決して堅苦しいばかりの学生生活ではありません。アルバイトの仲間や同級生と九州各地や東京、韓国へ旅行に出かけたり、配属された研究室のメンバーとBBQや寿司・たこ焼きパーティーを開いて盛り上がったり。勉強だけでなく、人との出会いと交流に溢れた刺激的な日々でした。修士課程での教育実習をきっかけに素晴らしい先生方と出会い、その縁が後の結婚や出産、子育てへと広がっていったことも、私の人生の大きな糧になっています。

しかし、当時の私が順風満帆だったかというと、決してそんなことはありません。将来の進路には本当に頭を悩ませていました。食品企業、公務員、教員、病院……選択肢が多すぎるうえに、研究職への憧れを持ちつつも、目の前にいる恩師の圧倒的な知識や研究力、教育への姿勢を見るたびに、「私なんかにとても務まるわけがない」と自信を失い、怖気づいていました。研究室で仲間と過ごす時間は楽しくても、一歩足をとめると「卒業後、本当に自分に合った道はどこなのだろう」と答えの出ない悩みを抱えていました。悩んだ末に私が選んだのは、憧れの職業の一つでもあった病院の管理栄養士として働く道でした。



学生時代、研究室のメンバーと（本人左端）

葛藤の末に踏み出した社会人生活でしたが、病院での14年間の臨床経験は、私にとってかけがえのない財産となりました。そして14年が経った今、私は大学助手として母校に戻り、働きながら博士課程で学び直しています。修士時代の恩師が現在の指導教員へつないでくださり、同僚の先生にも支えていただきながら学べることを本当にありがたく感じています。憧れつつも「自分には無理だ」と一度諦めた研究の世界に、遠回りをして辿り着いたのです。

20歳の頃、恩師からいただいたのは、単なる研究の技術ではありませんでした。「どんな職業に就くか」よりも「その仕事をどういう価値観で行うか」。目に見える成果やお金だけにとらわれず、科学の尊さや信念を持って生きることの大切さを教わりました。あの時、迷いながらも勇気を出して一つひとつの選択肢を試したこと、そして直面した課題から逃げずに突き進んだ経験が、今の私を支える大切な土台になっています。

今、進路や将来の自分について悩んでいる人も多いかもしれません。でも、最初から自分にとっての正解が分かっている人ばかりではありません。たとえ遠回りに思える道であっても、自分が「何のためにそれを大切にするのか」という軸さえ持っていれば、その時々の出会いや経験が、後に思いがけず繋がることがあります。20歳という貴重な時期に、ぜひ「自分は何を大切にして生きていきたいのか」をじっくり考えてみてください。悩み抜いた先の選択は、どんな道であっても決して無駄にはなりません。

思い出の本

パウロ・コエーリョ

『アルケミスト　夢を旅した少年』

学生時代、恩師から薦められた本で私の心の支えになっていました。作中に出てくる「マクトゥーブ（そうなることになっている）」という言葉が印象に残っています。20歳の頃、「自分には無理だ」と諦めた研究の道に14年を経て戻ってきた今の人生と重なるからです。迷うことも多い毎日ですが、20歳の時に得た「何を大切に生きるか」という軸と不思議な縁に感謝しながら、自分の選択を歩んでいます。

FUKUOKA WOMEN'S UNIVERSITY

公立大学法人
福岡女子大学

〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘 1-1-1
Tel.092-661-2411（代表） Fax.092-661-2420
http://www.fwu.ac.jp/